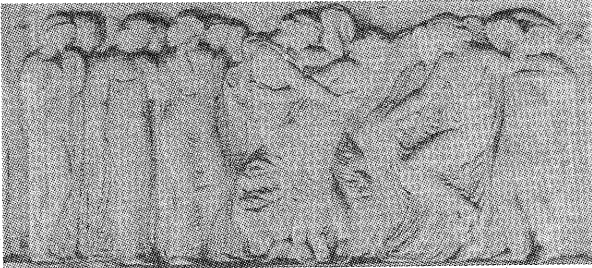


東京都美術館 美術図書室



講堂脇を飾る

ジョセフ・ベルナル

《舞踏》

美術館・画廊・デパート…今日、様々な場所で美術展覧会が開催され、展覧会カタログ・ポスター・チラシ・絵はがき等の関係資料が夥しく印刷され、頒布されている。が、そのうちどのくらいの資料が収集・保存・利用されているのだろうか。

出版ルートに乗らないこれらの美術関係資料は入手が非常に難しい。会場に向いて購入する。今後、展覧会開催の折にはカタログを寄贈してくれるように依頼する。古書目録を渉猟して買い付ける。美術関係者の遺族に蔵書の寄贈を願い出る。近年新設された美術館併設の図書室ではこの地道な作業を日々たゆまず行っているが、その嚆矢であり、美術図書館として日本で初めて公開制を導入したのが東京都美術館美術図書室である。

1926（大正15）年、上野の森に東京府美術館が産声を上げ、その50年後の1976年に美術図書室が開室された。日本において学術的な価値を持った展覧会カタログが作成されるようになったのは1980年代以降といわれることから、この開室は時宜を得たものであり、先見の明ありというべきであろう。

東京都美術館美術図書室の資料収集のテーマは「日本の近・現代美術」で、現在開催されている美術展は勿論、戦前の資料も古書店の目録に随時目を通して収集を図っている。司書の方のお話では、西洋美術・東洋古美術分野は資料的に弱いとのことだが、寄贈を受けたカタログにはそれらも多く含まれ、さすがと思わせる蔵書内容である。東京府時代の公募展の図録も一部であるが引き継いで所蔵している。武者小路実篤、石井柏亭らの旧蔵書からなる特別文庫もあり、雑誌・文庫については目録が上梓されている。

現在、カタログは3万冊、美術関係雑誌は1,500タイトル。カタログの検索には展覧会名・作家・会場・美術団体等に分けられたカード目録が用いられ、このうち作家名の目録は作家の経歴等のレファレンスに威力を発揮している。

さて、以上の所蔵資料は全て1995年開館を目指し、現在江東区木場公園内に建設中の東京都現代美術館に移される予定である。新美術館ではコンピュータを導入して、よりサービスの向上に努めたいとのこと。更なる発展を期待したい。

（参考課 石渡裕子）